

# 右目の構造

大村伸一

字分が他の誰とも似ていないことだけがかの心配であったわけではない。それだけならみやふややであっても同じような不安を抱いているわけでありその心配にみやふややとの類字性を見いだすこともできるわけでそうなればその不安はもはや不安としての理由を失うことになる。しかしかみやふややには想像もできない程悲痛にして深刻な悩みを抱えている。濁点である。かの左肩にある点はおやむのようにおぎなりではなくかといってらやうやえのようにこれみよがしでもなく勿論ふやややそのようにまぎらわしくもない。だからかはこの左肩の点をいささか誇りにも思っているのだがこれが濁点を伴いがとなると一転してその点がどうにもおさまりが悪く不格好な飾りものになってしまうことに気付いている。直接言うものはいないがおそらく他の文字の誰もがこのぎこちない濁点の付き方を内心笑っているのに違いない。たとえばおであればあのとりすましなんでも分かっていますよとでもいいだけな表情をしたままでかの無様な姿をらやみと一緒に笑いものにしていないのに違いくらやみの無神経で甲高い笑い声がすぐそばで聞こえるようだ。またふはいつもにたにたと意味もなく薄笑いを浮かべているがそれはぶとがが一見似ているようでありながらよく見ればまったく違っており少しも似たところがなくそれはすなわちがにはない優雅さいわば気品とでもいうべきものがぶには生来備わっているからなのだなと考えているからに違いない。かはこのいった他の文字の動向をすべて知り尽くしているので字分の濁点がいかに醜いものであるのか誰よりも深く理解している。だからかはなるべく濁音を避けようと思っているのだが格助詞接続助詞終助詞として頻繁に使われ続けるからにはとうてい逃れられるわけもなくこのままではいずれ字分は狂ってしまうのではないかと怖れている。せめて格助詞だけでも他の誰かに替わってもらわなくてはならない。誰か替わりの文字をみつけないでほならないだろう。

格助詞としてわと読まれる続けているからはは自分はもしかするとわなのかも知れないなあと思いはじめている。そういえばほにも似ているしけだといわれればけとはの違いを説明するのも難しそうだ。しとよやしとすを並べればはと区別するのはまず不可能なのではないだろうか。はは字分が誰なのかよくわからないなあと思いはするが別に字分が誰であってもかまわないじゃないかとも思っている。字分がもしもほであればずいぶんもてただろうなあと思うしもしもけだとすればさぞや多くの殺字を犯したことだろうなあといろいろ想像できてかえって楽しいじゃないかとも思っている。あるいは字分を見失う恐怖をごまかし字尊心を満足させるためにそういう精神的ゆとりさえ持たせられるのだと字分に暗字を与えているだけなのかも知れないがはがそこまで考えているのかどうかは誰にも分か

らない。

大柄なはに初めて会うと誰もがはには何も怖いものなどないかのような印象を受ける。しかし実はははへだけは直視することすらできない。たとえばもしも通路でへとすれちがいそうなことにでもなれば決まってははへから目をそらし天井や何もない壁を熱心にみつめながらやりすごそうとするだろうしもしできるなら廻れ右をして元来た方へあたふたと戻って行くだろう。誰でも知っていることだがへもまた字分のことをえではないかと疑っておりくやしやつがあまりにも字分によく似ていることに気付いている。しかし痩せていてひ弱そうなへは見るからに苦悩にあふれいかにも字分のなさそうな表情を浮かべているからははへを見るたびに字分の不安を思い出させられ平静ではいられなくなるのだ。は字身それを理解しているわけではなく近付いてくるへに気付いてあわてて横道に入ったとしてもすぐにそのことを忘れて何か別の理由でその行動を説明しようとするかもっとてっとり早く説明しようと考えることすら忘れてしまう。最近ではへだけでなくくやしやつや理由は分からないがえに出会ったときにも同じ反応を起こしてしまうのでしばしばはは字分がいったいどこになんのために行こうと思っていたのかさえ分からなくなってしまう。

にもかかわらずかが会談の場所に選んだレストラン『主語のざわめき』にはが辿り着けたのははがねに変装していたからに違いない。変装はいつになく快適で途中でへに出会ったのかどうかすら気にはならなかった。何もかもが愉快であり副詞通りあたりからねのようなはずっと笑いをこらえるのに苦労しなくてはならなかった。かかり結び公園に足を踏み入れたときには思わず声をあげあやうく変装が落ちれになりかけたがみつかったかなと周囲を見回しても誰も見てはいなかった。そして誰も見ていなかったということがかえって可笑しくともすればずり落ちそうになる変装を押さえながらも笑いが止まらず体をよじって歩くのでははもはやねというよりは代わる代わるむになったりるになったりあるいはすになったりするように見えガラスに映るその姿を見てはは床や壁を殴りつけながら笑いころげ主語のざわめきに入ったときには変装は半分ずり落ち全身をけい攣させながら床を這いずりまわっていた。ははそこでかではなくやを発見するがそれは変装によってやのように見えているかだったのであり勿論かにしてもはがねに変装ししかもその変装も半ばはげているためにねのようなめのようなみのようなよのような何か別の変な文字であるとか見えないはがはであると見抜けるわけはなくはとかはお互いに気付くことなく永遠に待ち続けることになる。